

ヒトはスポーツを通して多くのことを学ぶ



- ◆ 期日 令和元年 11 月 8 日(金)
18:00 ~ 19:30
- ◆ 場所 富山県民会館
- ◆ 講師 筑波大客員教授 勝田 隆さん
- ◆ 演題 「2020 にもけて・2020 をこえて/
ヒトとの繋がりが人を育てる」

スポーツとはそもそも、「まじめに仕事をする日常から一時的に離れる」という意味を持つ中世ラテン語の「deportare(デポルターレ)」に由来します。一方、「game(ゲーム)」の語源に通じる単語の中には「関係、参加、共同」といった意味があったとの報告もあります。このような説から考えると、スポーツとは「人と人が直接的に出会い、日常と違う時間を大切にすること」であり、「共同して楽しい関係を創り出すこと」と考えることができるのではないのでしょうか。

2019 年秋、日本国内で開催されたラグビーワールドカップ(W 杯)は、大きな盛り上がりを見せました。何がその原動力となったのでしょうか。やはり、「世界最高峰の真摯な競い合いと楽しい時間を共有しようとする人たちがリードし、直接的に人が集まった」からではないのでしょうか。

「人とのかかわりの中で学ぶことには、極めて強い力があり、ありとあらゆる学習に当てはまる」とパトリシア・クールという米国の研究者は話しています。このことから考えると、スポーツは「ヒトがヒトとどう関わっていくか」という最も人間的な営みであり、ヒトはスポーツを通して多くのことを学ぶことができます。

特にオリンピックやパラリンピックのようなトップアスリートによる競い合いでは、自分自身の能力や可能性も含め、「ヒト」という存在が過度なまでに意識され、極限レベルでのかかわりが生じます。これは、日常生活における学びの場とは明らかに異なるエネルギーがそこに生まれ、効果的な学びを得ることも容易に想像できるでしょう。

「ゲームが成立し、そこが学びの場になるために、何を大切にすべきか」について考えてみたいと思います。ジャック・ロゲ(前国際オリンピック委員会会長)は 2011 年、「スポーツは危機に瀕している」と述べました。その要因として、ドーピング、八百長、ハラスメント、人種差別などが挙げられます。

現在、スポーツにおいて「integrity(インテグリティ)」(訳語としては健全性、品位、真摯さなど)という言葉が、国内外で広がっています。ドーピングや八百長などに代表される不正は、スポーツの価値を損なうも

のと考えられます。

ラグビーの競技規則は、「LAWS OF THE GAME」などと標記されています。ここには「ボールを獲得しようとして相手に強烈な身体的圧力をかけていると見られることにはまったく問題はないが、それは故意に、あるいは悪意を持ってけがを引き起こそうとする行為とは全く別なものである」と記述されています。

また、「競技規則は、異なる体格、スキル、性別、そして、年齢のプレーヤーに、統制されているが競争性があるため楽しむこともできる環境において、それぞれの能力のレベルで参加できる機会を提供するものである。」との記述もあります。つまり、「すべての人にとってのスポーツ」であり続けることの重要性が明記されているのです。ゲームのルールや審判の存在などからも、スポーツに参加する人が持つべき姿勢や視点について共有しておくことも大切です。

聴覚障がい者ラグビーの試合を観戦した経験があります。審判が笛を吹くと、選手にそれを知らせるために観客がカラーボードを高く掲げて知らせていました。選手と審判の間での聴覚によるコミュニケーションを、観客も間に入って可視化することで可能にしているのです。スタジアムには、敵も味方も関係ない関係性ができあがっていました。観客もゲームを健全かつ魅力あるものに創っていく大切な役割を担っていると強く感じました。そこにいるすべての人が「参加していること」を実感しました。

人間には、他人の表情を読み取る能力があると言います。言葉や文化、歴史などが違ってても、世界中で通じるものがある。それは「笑顔」です。スポーツを通して「笑顔」がたくさん生まれることこそ、最も重要だと思いません。(文・写真 若林朋子)

【略歴】

かつた・たかし 埼玉県出身。埼玉県や山形県で高校教諭、仙台大学教授、国立スポーツ科学センター長、ナショナルトレーニングセンター副センター長、日本スポーツ協会理事、日本オリンピック委員会選手強化本部常任委員、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会インテグリティ・ディレクターなどを歴任。現在、筑波大客員教授、2019 ラグビー W 杯組織委員会評議委員などを務める。